

## 会員研究

# 鎌倉戦乱シリーズ その9

宝治合戦（三浦の乱—三浦一族の滅亡）（後編）

—— 宝治元年（一二四七）六月五日 ——

山崎宣晴

講読載いているように、比企、畠山、和田の豪族ら頼朝股肱（ここう）の忠臣の武将が北条氏の奸計で相次いで斃され、今また三浦一族の滅亡の時を迎えることになる。かくして宮騒動は一応解決し、北条庶子名越氏中心の反政権派は瓦解したかに見えたが、一方新たな反幕勢力が台頭してきた。

即ち、三浦泰村（\*1）の弟光村（記念号「莊志」参照）は頼経上洛に扈從（こじゅう）し、御家人達に「相構えて、今一度鎌倉に入れ奉らんと欲す」と語った。その意味するところは、頼経を京に追却した時頼を倒すことにあり、その不穩の流言は鎌倉中に拡がり、時頼の耳にも入る。傍若無人と酷評され煙たがれた三浦義村（\*2）が延応元年（一二三九）

に急死した後、三浦宗家を継いだ次男の泰村は「深秘の御沙汰」に参画し政治を動かしていた。彼は宮騒動で得宗打倒に加担した黒幕の一人であった。そこで時頼は執権政治権力の強化と軍事力の増強を狙う目的で、大叔父の六波羅探題北方、北条重時を鎌倉に呼び戻して、連署（七五号参照）に据えようとした。しかしそれは泰村の反対で沙汰止みになった。「然る可からず」と。そのように三浦氏の発言は執権時頼でさえ無視できない存在であった。得宗執権制瓦解の危機を感じた時頼の、直撃でなく時頼常套手段のじわじわ追い詰め戦法を紹介する。

小心翼翼気弱の泰村氣質に着眼し、時頼は彼の不安と動揺を掻き立てる心理作戦を展開する。

由比ヶ浜の海水が真赤な血のように見えたとか、流星が音を立てて流れたとか、そして黄蝶や羽蝶が鎌倉中に乱れ飛んだとか、不吉な予感を現わす流言蜚語が口伝されたが、実際には何も起こらなかった。「吾妻鏡」では、これらの事象が実際に起こったのか、編纂の際に挿入されたものか判然とされていないという。将門の乱や前九年の役の時には、黄蝶、羽蝶、羽蝶が飛んだと古老が語ったという。兎に角、戦が起る不吉な前兆だと、人々は怖れわなないた。次

は現代流のスパイ作戦である。実に巧みな、敵中に味方を作る作戦で三浦一族の佐原流（系統）三浦盛時を動かし、得宗被官（御内人\*3）として迎え入れた。和田の乱では三浦が裏切ったが、今度は同族の佐原一族（\*4）に見捨てられることになる。泰村を懐柔すべく、彼の次男駒石丸（九歳）を自分の養子にすると約束し、泰村は快諾した。その反面で、時頼は三浦氏への対応を相談するため、外祖父安達入道覚地（\*5）を早々に鎌倉に呼び戻す。入道は俗名を景盛といい、時頼の母松下禅尼の父である景盛は三浦氏の跳梁跋扈

（ちようりようばっこ）を憎んでおり、高野山より戻るや否や（宝治元年—一九四七—四月三日）、嫡男の義景（一二一〇—一二五三）と孫の泰盛（\*6）を激しく叱りつけ、武備の必要を強調した。「三浦は武門に傲慢であり、安達を蔑（さげす）むであろう」と…。

この時点で、時頼は三浦氏打倒を心中決意、景盛とその打開策を協議する。しかし意に反し、争いを好まぬ時頼は最後まで和平の道を探していたものと伝わる。宝治元年六月に入ると、不穩な市中的動きが愈々（いよいよ）活発になるその矢先の同年五月十三日、將軍頼嗣の夫人檜皮姫（時頼の妹）が僅か十八歳で亡くなったので、時頼は軽服（きようふく）のため泰村館（\*7）に入った。義理の兄（北条泰時の女子が泰村の妻）に昵近（じつきん）さを示して気を和らげるためにわざわざ、服喪に行っていたのである。

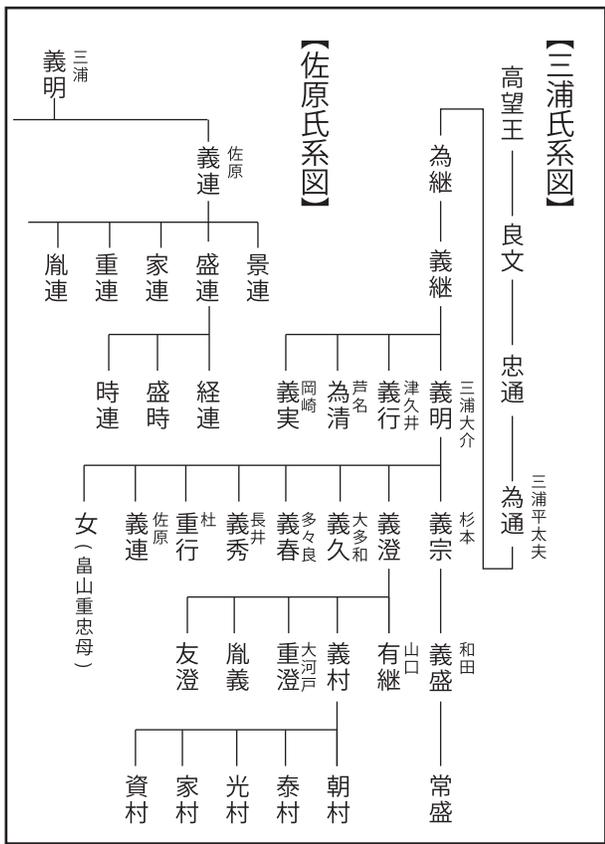
一方で泰村は時頼と景盛の内々の話し合いや不吉な噂が耳に入り、不安を募らせていた。五月二十一日、鶴岡八幡宮の大鳥居（一の鳥居?）の前に、三浦泰村兄弟は執権の命に服さないで、近日誅

罰されるであろう」という立て札（落書？）が立てられた。更に五月二十七日、服喪中の時頼は当時の慣習で泰村館に一泊した。その夜中急に屋敷内ががやがや騒々しくなり、何やら危険を感じた時頼は密かに館を脱出した。これは三浦一族が安達氏の挑発にのり、行つた戦支度だったということ。泰村が時頼に陳謝し落着いた。時頼は泰村に家臣を使者にして、「討伐する存念はない」という誓詞を遣わした。また泰村は喜悅して「拙者は執権殿に弓を引く気など毛頭ござらぬ」と返事をしてい

る。この時頼の行為に景盛は過敏な反応を示し、このままでは三浦一族はひとり驕りを極め、ますます我等安達一族を蔑如することになると、安達軍を叱咤激励して甘縄の館を出て、真一文字に泰村邸に向つた。一団が「おう」と鬨の声を上げ筋替橋（\*8）の北から三浦邸へ突撃、合戦の火蓋が切られた。和平成つて寛いでいた時で、びつくり仰天「おのれ、騙し討ち時頼は卑怯な奴」と、右往左往しながらも、敵に果敢に応戦する。時頼が安達軍に加勢したと知り、泰村は氣勢をそがれたのは事実で

あろう。三浦一族は諸処で勇敢に防戦するが、衆敵せず次第に戦況は不利となる。迎撃する光村は時を見て反撃しようと、僅か八十騎で永福寺（\*9）に潜む。三浦軍も徹底抗戦し戦は三ときにも及び、これ以上の争いは面倒と、安達勢は火攻めにした。泰村は最早これまでと法華堂（\*10）に楯籠る。永福寺の光村は法華堂に向う途中の敵陣突破はきわめて壮絶で、斬つて斬つて斬り抜けた。泰村は最後に及び「北条を

恨むな。何れ時頼も讒言で三浦が滅びたことを知るであろう」と皆に言い聞かせたという。かくして三浦一族羽はかなくも時頼の御影の前で自刃していった。共に自決したのは毛利季光（すえみつ：大江広元の四男）他武将二百七十六人、郎党も含めて五百余人であった。光村は自ら刀で顔を削り、正体が分かるかどうか周りもの聞いていたと言う。極めて凄惨（せいさん）であつたと、恐怖の余り堂の天井に潜んでいた承仕（しよ



**注記**  
 \*1 三浦泰村（？）1247）妻は北条泰時娘。時頼の信任厚く勢力強大となるが、逆に北条氏の警戒するところと鳴る。評定衆に列し、幕政の重責を担う。  
 \*2 三浦義村（？）1239）北条氏に次ぐ大豪族で重位を占める。評定衆。伊賀の乱で北条氏に忠誠を示す。頼朝拳兵の時より源家に尽くす。  
 \*3 御内人（みうちびと）得宗の直屬家臣。  
 内管領（ないかんれい）として得宗専制政治を推進した。  
 \*4 佐原一族  
 盛時は三浦義明の曾孫で、祖父

— 完 —

の代で分流する(横須賀)。

\*5 安達入道覚地(かくち)、名は景盛(?~1248)

娘は時頼の母の松下禅尼。信仰心厚く又立派な武人でもあった。

実朝死後、菩提を弔うため高野山に入る。

\*6 安達泰盛(1231~1285)

霜月騒動で北条氏内管領平頼綱と争い族滅された。

\*7 泰村館  
鶴岡八幡宮の東隣、横浜国大付属中小学校敷地の一部。

\*8 筋替橋(すじかえばし)  
鎌倉十橋の一つ。現バス停、大学前[辺り]。道が斜めに交わっている所の意で、現在は暗渠となる。

「須地賀江橋」とも言う。

\*9 永福寺(ようふくじ)跡  
室町時代後半に廃寺。建久三年(1192)造営終わる。藤原一族や弟の義経の鎮魂と自らの権勢を示す狙いがあった。池を配した浄土庭園を備えた壮大な寺院であった。明治新政府の神仏分離令で法華堂は廃され、白旗神社となる。国指定史跡

\*10 法華堂(ほっけどう)跡  
大倉幕府跡の裏山にある頼朝の墓辺りが堂跡とされる。もとは頼朝の持仏堂であった。明治新政府の神仏分離令で法華堂は廃され、白旗神社となる。国指定史跡

参考図書

参考図書

鎌倉北条氏の興亡	奥富敬之	吉川弘文館
鎌倉合戦物語	笹間良彦	雄山閣出版
吾妻鏡事典	佐藤和彦・谷口榮	東京堂出版
北条時宗と蒙古襲来99の謎	森本 繁	PHP文庫
京・鎌倉ふたつの王権	本郷恵子	小学館
「鎌倉の碑」めぐり	稲葉一彦	表現社
相模のものゝふたち	永井路子	有隣新書
かまくら子ども風土記	鎌倉市教育研究所	鎌倉市教育委員会
鎌倉事典	白井永二	東京堂出版
鎌倉歴史散歩	佐藤和彦・錦昭江	河出書房新社
鎌倉の古寺	原田 寛	JIBパブリッシング
鎌倉武士	鈴木 勤	世界文化社

